資料　１

村の聖地―モリに宿るカミ

― 生駒谷の七森信仰―

平成２３年８月１９日

景観形成基本計画策定委員会

〈はじめに〉

生駒市の指針「生駒を関西一魅力的な住宅都市に」

魅力的な住宅都市に不可欠な要件　インフラの整備　緑豊かな環境の保全

地域の歴史と文化を大切にする心

Ⅰ　生駒谷十七郷の原風景

１　古代

『日本書紀』の「膽駒」

「神武天皇即位前紀」神武東征譚　長髓彦との戦い

「皇極天皇二年十一月条」山背大兄の変

「同三年六月条」同上

「斉明天皇元年五月条」龍に乗った者が空中を馳せて膽駒山に隠れた

すべて「膽駒山」

『万葉集』の「伊古麻」(別紙参照)

「射駒山」「伊駒山」「伊古麻山」「伊古麻乃山」「伊古麻多可祢」

すべて「山」・「高峯」

飛鳥・藤原京・平城京から離れた僻地

大和の西北隅の辺境の地　「神さぶる」霊地

２　中世

『竹林寺略録』東大寺沙門凝然　「地形は勝妙にして医王生身の庭なり。唐の五台山と異ならず。」

『諸山縁起』」「北峯の宿」信貴山・往生院・髪切・生馬・鬼取寺・田原・石船　　修験道の聖地

３　近世

『生駒山寶山寺縁起』「其の山は先年麓を行き過ぎしとき遥かに見る、そのゆへ知らずといへども、神仏霊応の勝地たるべきとおもひ」湛海律師述

４　現代

『生駒の神々』大阪大学宗教社会学の会

「四六時中、不思議な霊気を醸しだす」「生駒にはいったとたん強い衝撃を受けた。異文化に接したときのカルチャーショックに似ていた」「生駒は民間信仰の宝庫」

山中に無数の行場・宗教施設

Ⅱ　民間信仰の原点―モリ信仰

１　わが国古来のカミ

自然の中にあまねく遍在するカミ

山・海・川・磐・樹木に宿るカミ

自然の営みの中にカミの恩恵と怒りを感得　　大地・太陽・雨・暴風雨・雷・火山

「一神教は高度な宗教・多神教は低級な宗教」という迷信

わが国の基幹産業である稲作農耕　カミと共に働く生活　日本人の基層心理の中に脈々と継承

海開き・山開き・地鎮祭　遍在するカミに安全を祈願

2　村の聖地―モリに宿るカミ

樹木の繁茂するモリにカミが宿る　ヤカタも石造物もない空間(小祠などを祀るのは後世)

「森には神様がいる。鎮守の森は日本文化の原点です」宮脇昭

「森には神様がいる。神社には必ず森を残した」梅原猛

※　神社に森を残したのではない。モリにカミが宿っており後世に神社(社殿)が建てられた

モリ自体が畏敬の対象

日本最古の神社・大神神社(三輪明神)　本殿はなく拝殿のみ　三輪山がご神体

春日大社　「遣唐使は東に向かって航路の安全を祈願」故花山院親忠宮司

社殿は南面(北に向かって拝礼)　古くは東の御蓋山がご神体

3　モリのカミさん

「モリのカミさんはどんな神？」　古老の答え「モリのカミさんや」

名もないカミ　得体のしれないカミ　言葉で説明しきれないカミ　原初的な信仰

「天之御中主神」「天照大神」　『記紀』に登場する神々　人間の観念から生まれた新しい神

4　各地に伝承されているモリ信仰

若狭大島の「ニソの杜」　タブの繁茂するモリに土地を拓いた祖霊を祀る

西石見の「荒神森」　旧家の裏山などに祖霊を祀る

薩摩の「モイドン」　同族でカミの依代の樹木を祀る

美作の「荒神ブロ」　村や屋敷内のモリ(フロ)を祀る

西伯耆の「荒神」　モリや石造物を荒神として祀る

沖縄の「御嶽(ウタキ)」　モリの中の空間にカミを迎えて祀る

5　共通する信仰

きびしい禁忌　不浄・穢れを忌む・モリへの立ち入り禁止・樹木や枝の伐採禁止・枯葉一枚持ち帰ることも禁止・葬列の通過を忌む

激しい祟り　禁忌を犯すと激しい祟りを受ける　無数の体験談

「林木伐採するものあれハ或ハ火難を得又ハ悪病を受く」湛海律師「前掲書」

村を保護　雷が落ちない　流行病にかからない

集落を取り囲む位置にあるモリ(「辻村領繪圖」)　道祖神・勧請縄と共通の信仰

カミの二面性　『旧約聖書』民俗の守護神・怒りの神

『日本書紀』「和魂(にきミタマ)」・「荒魂(アラミタマ)」(仲哀天皇九年九月条)

祟りの実例　美作　勝部神社　自衛隊日本原駐屯地

生駒谷　小瀬のウエダのモリ　小倉寺のカンジョウのモリ　辻のドムネのモリ

Ⅲ　生駒谷の七森信仰

１「七」という数字

「七」　古来特別なおもいがこめられてきた数字

①　人生の節目　お七夜・七五三・古希(七十歳)・喜寿(七十七歳)

②　象徴的数字　七不思議・七賢人・七福神・七堂伽藍・七草粥

③　多数を表す　七曲がり・四十九峠(曲がり)・七つ森(『屈折率』宮沢賢治)

④　故人の法要　初七日～四十九日(七日ごとの法事)・七回忌

２　各村に七森

それぞれの村に七つのモリを祀る(一部小村を除く)　他に類例を見ない特異な信仰

人為的な一致　不思議な印象

３　多数あったモリ

市内全域の聞き取り調査

古老たちの語るモリをすべて数えると八森・九森・十森にもなる

本来モリは「七」と限らず多数存在していたのではないか

４　なぜ七森なのか―七森信仰成立の契機

中世に生駒神社が八幡信仰を受容

神社古来の祭神「往馬坐伊古麻都比古神社二座」(『延喜式』巻第九神名上(神名帳))

鎌倉期に八幡神(神功皇后・仲哀天皇・応神天皇・気長宿祢王・葛城高額姫)の五座を奉祀し祭神が七座になる(『生馬八幡宮略縁起』『生駒曼荼羅』)

生駒神社　生駒谷十七郷の惣鎮守社

郷民の精神的支柱　村落共同体結束の絆

郷民の暮らしに絶大な影響力

祭神が七柱になったのを契機に多数のモリを七森に集約

Ⅳ　モリ信仰とみどりの景観保全

１　モリ(自然)への畏敬の念

先人たちがモリのカミを畏敬し、きびしい禁忌を守ってきた信仰

結果としてみどり豊かな景観を保全

「木を植えるのは心の問題。単に防災や環境保全、水質管理のためだけではない」(宮脇昭)

生駒神社の社そう(平成 10 年県指定天然記念物)

見事な原生林

人間が手を加えて守ってきたのではなく手を加えなかったから保全されてきた

２　景観保全活動の根幹

急激な都市化の流れ　開発によりモリのいくつかが消滅

「モリ失ったことにより、自然を大切に守る豊かな心をも失ってしまった」

地域の歴史と文化を大切にする心

自然への畏敬の念を根底に据えた景観基本計画策定を期待

こに菜畑村の里正朴木六右衛門と老父浄
空と云ふ者共と際て言ひく之教えの如
村人困窮すること皆是般若の窟の所望を
受る故なりいつれの道人なりとも居住の人
あらばみづからを獻ずべしと願へば紹りけ
師仁恵は慈へきを居とい手うつく其ことに
先年襲を切きるとして遠にたるそゆへとそ
といふと外仏霊應の勝地なるべきなれば兼
て帝王すなわち手代を移して盡形壽

那して新をとゝにかくさば乃至悪地成就
を期して居住をへしつゝ会所をあくと
みて発願をなす初めて法華を誦
する童子あり手に投じて出家となり
妙道と名く後年遂して給仕をなんと別して
同世代別てこれも若年ようく艱難の地
慈ぶむことを願ず一女年と孫小孫
置僧浄人一人を具して此襲に籠り願い
延寳六丙午年十月十日なりそは途中を

号して記すなり。本堂の不動明王之像を作て寂光と號し給れども此度焼失仕候
く水木不足にて永く居住仕難く成て唯
之幸計と知り其を恐れ相應の霊地
有りと加被して手を移すなり多く持金
なるに幾度なり明王威應なりて頻て此所
へなり移りなき陽相なり為る度ふ回は乃
人なて苦しいなく家に回州年解那菜畑の
庄の那に般若の窟と号し度なり作られ

般若の窟とは此なり役小角居住の地
ト伝るなりなる行と雖人の住難くると
いえども唯鬼魅蠱毒して行く人を怖
ることなく此窟に入ることも屋なりて
入てあるとき又林木伐採するものあれば
或いは人鬼を得又人の病を受く為りと云へ
ども凡夫貪心熾盛して新の住人の業
なれば山林を切て少て南部の
村人貧窮を痛して貴国第一の貧地なり

「辻村領繪圖」寛政元年(辻町農家組合所蔵)

万葉集・万葉歌碑

万　　葉　　集	万葉歌碑
露霜の　秋さり来れば　射駒山　飛火が岡に　萩の枝を しがらみ散らし　さ雄鹿は　妻呼びとよむ　山見れば 山も見が欲し　里見れば　里も住み良し　巻六　一〇四七	生駒市役所
妹がりと　馬に鞍置きて　射駒山 打ち越え来れば　黄葉散りつつ　　巻十　二二〇一	総合公園 (小明町)
君があたり　見つつも居らむ　伊駒山 雲なたなびき　雨は降るとも　　巻十二　三〇三二	四季の森林園 (北大和)
夕されば　ひぐらし来鳴く　伊古麻山 越えてそ我が来る　妹が目を欲り　　巻十五　三五八九	大瀬中学校 (小瀬)
妹に逢はず　あらばすべなみ　岩根踏む 伊古麻の山を　越えてそ我が来る　　巻十五　三五九〇	高山竹林園 (高山)
難波津を　漕ぎ出て見れば　神さぶる 伊古麻高峯に　雲そたなびく　　巻二十　四三八〇	暗越街道 (西畑町)

生駒を詠んだ歌　すべて「山」「高峯」
飛鳥・藤原京・平城京から遠く離れた辺境の地
神霊の宿る聖地

飛火（とぶひ）　烽火（のろし）の意　「是歳、對馬嶋・壹岐嶋・筑紫國等に、防（さきもり）と烽（すすみ）とを置く」

『日本書紀』天智天皇三年十二月条
大和では春日と生駒に烽火が置かれたという
「是の月に、倭國の高安城・讃岐國の山田郡の屋嶋城・對馬國の金田城を築く」天智天皇六年十一月条
「高安城を修りて、穀と鹽とを積む」同九年二月条